

I タイトル「減災と技術 —災害の教訓を活かす—」

1. 教材作成の狙い

- ・ 教材作成の狙いは、技術者が知っておくべき都市防災に関する基礎知識レベルとし、技術士として必要な技術の知識をより深めることへの一助となり得る内容とする。このため、現在の最新状況をきちんと整理し、客観的に分りやすく整理し、記述する。

2. 執筆者、担当責任者について

- ・ 各章の執筆者または担当責任者は、担当した項目、章は責任を持つこと。ただし、状況に応じて、支援等は柔軟に進めること。
- ・ 予定の期日を厳守すること。

3. 目次構成と担当者

- ・ 目次構成は、基本的にはこの内容で進め原稿がある程度進んだ段階で担当執筆者の意見も含め調整する。
- ・ 現在の項目の下の小項目は執筆者に任せる。

序文（消防研究所理事長 室崎益輝）

第1章 災害の歴史と防災対策の経緯（大島）

- 1.1 自然災害の変遷と特徴
- 1.2 大災害の種類と特徴
- 1.3 集中豪雨災害の概要
- 1.4 近年の自然災害の特徴
- 1.5 防災体制と災害対策の現状と課題等

第2章 気象と災害（清水、神田(4)、松井(7)、足立（近畿支部・気象庁・(1), (2)）

- 2.1 異常気象の概要
- 2.2 都市のヒートアイランド化
- 2.3 洪水、浸水災害
- 2.4 津波災害（神田）
- 2.5 土砂災害
- 2.6 強風災害
- 2.7 雪害（松井）

第3章 地震と防災（大角）

- 3.1 地震活動
- 3.2 地震の予知・予測
- 3.3 強震観測
- 3.4 地震防災体制

- 第4章 土木構造物と耐震（松井）
 - 4.1 地震災害の概要
 - 4.2 耐震設計法の変遷
 - 4.3 耐震診断
 - 4.4 土木構造物の耐震
 - 4.5 ライフラインの耐震
 - 4.6 耐震補強
- 第5章 建物・建築設備と耐震（宮原、米田）
 - 5.1 地震災害の概要
 - 5.2 建物の耐震補強
 - 5.3 建築設備の耐震
- 第6章 土砂災害と防災（湯沢、井上）
 - 6.1 斜面災害
 - 6.2 大規模崩壊
 - 6.3 地表変動の発生予知・予測
 - 6.4 土砂災害の被害軽減と防止対策
- 第7章 市街地火災と防火対策（三船）
 - 7.1 都市火災の歴史
 - 7.2 市街地火災の性状
 - 7.3 市街地防火対策
- 第8章 震災と環境・廃棄物問題（福岡）
 - 8.1 自然災害と環境影響
 - 8.2 廃棄物処理
- 第9章 災害情報と情報の伝達（山口）
 - 9.1 災害情報管理の概要
 - 9.2 風水害情報
 - 9.3 土砂災害情報
 - 9.4 地震災害情報
- 第10章 地域防災力の向上（山口）
 - 10.1 防災教育・訓練
 - 10.2 市民活動とネットワーク化
 - 10.3 専門家の活動
- 第11章 企業と防災（戸村、永井）
 - 11.1 産業施設と防災
 - 11.2 企業の防災活動

第12章 地域防災のフレーム（松井、神田）

- 12.1 地域防災計画
- 12.2 災害応急対策
- 12.3 災害復旧・復興対策
- 12.4 都市災害のリスク管理
- 12.5 都市基盤施設の防災対策
- 12.6 地下施設の防災対策
- 12.7 ライフラインの防災対策
- 12.8 津波対策（神田他）

第13章 震災の教訓と復興まちづくり（三船）

- 13.1 震災復興の課題
- 13.2 復興まちづくり

第14章 関連法令（内藤、水野）

第15章 防災関連用語解説（内藤、水野）

- ・キーワード
- ・参考文献、資料
- ・監修者、執筆者一覧

II 編集、予定等について

1. 体制

- ① 執筆者、担当責任者：上記
- ② 委員会編集者：編集責任者（水野）、編集担当（大島、松井、三船、水野、山口、湯沢）
- ③ 監修者：室崎益輝氏
- ④ 査読者：別途選任される

2. 執筆、編集、監修等の流れ

- ・原稿執筆 ⇒ 委員会編集責任者（水野） ⇒ 編集委員会編集 ⇒ 監修 ⇒ 修正・補足編集 ⇒ 査読 ⇒ 修正 ⇒ 原稿仕上がり

3. 作業予定

- ① 原稿仕上げ、送信：9月11日（土）までに編集責任者（水野）へ原稿送信。
- ② 編集作業：9月12日（日）～30日（木）
- ③ 執筆者原稿修正作業：10月1日（金）～22日（金）
- ④ 編集委員会確認：10月23日（土）～31日（日）
- ⑤ 監修：11月1日（月）～11月20日（土）
- ⑥ 修正作業：～12月10日（金）
- ⑦ 査読：～12月末
- ⑧ 修正作業：1月14日（金）

4. 原稿執筆要領について

- (1) 執筆は、「技術士 CPD 教材」執筆等に関する要領に従うこと。
- (2) 1 章から 1 2 章までのページ数を概ね 150 ページとし、1 項目につき 2 ページ以内を目安とする。
- (3) 4 分の 1 を目安に図表を活用する。
- (4) 図表はできるだけ分りやすく作成する。出典、参考を明記する。

以上